

J10-03 ジュニアの保護者へのアドバイス

Advices for the Parents of Junior Athletes

ジュニア・スポーツでは、保護者は、子供の自主性を重んじると同時に、クラブの安全について確認・検証もすべきです。またフェアプレイを大原則とし、長い目で成長を見守りましょう。

1 安全確認 The Check for Safety

1.1 基本的な考え方

未成年者の課外・学外の集団活動(以下クラブ)の参加の際は、保護者は、(子供の自立的行動を尊重しながらも)保護者として、そのクラブの安全に問題がないか確かめるべきです。もちろん、「全てのクラブが本来、安全であるべき」というのは正しい主張ですが、現実には今日の報道を見れば判るとおり、少数ですが、クラブや塾などでの事件・事故も発生しています。確認するだけで防げたかもしれないリスクが、実際にわが子に降りかかったのでは、悔やみきれません。

もっとも、確かめたからといって、100%安全だと保証はできないし、保護者のチェックでリスクが見抜けるわけでもないでしょう。しかし、保護者が安全に関心を寄せ、「確認したい」という姿勢を示すことが、そのクラブ自身の安全への意識を高め、必要な緊張感を生み、実効的に安全水準を高められます。イヤに思われるのでは?との不安は不要です。もし安全確認が何か悪影響を及ぼすようであれば、それ自体、そのクラブの危険性の証明です。そういうクラブはすぐに辞めるべきです。

ロウイングに関していえば、本来、マナーを重んじ高いモラルを要求するスポーツであり、また同時に、日本ボート協会をはじめとして関係者は、安全に高い関心と意識が払い、より安心で安全なスポーツとすべく努力を継続しています。

1.2 リスクの要素

ここで言う安全に関するリスクとは、大きく2つがあります。

1. スポーツそのものに関わるリスク: ロウイングでは、乗艇中の遭難、トレーニングに関連する心身の急性的障害(例:熱中症、怪我など)、および慢性的障害(例:疲労骨折等々)
2. その他のリスク: 指導者や他のメンバーからの虐待・ハラメント(特に女子選手へのセクシャルハラメント)、または不道徳・反社会的な行為の強要

1.3 確認・検証の方法

保護者は、いつでも気になったときに安全について照会・検証する権利があります。以下のようなことが確認のポイントです。(具体的な言葉は、当然、適切に調整してください。)

過去に、クラブで重大な乗艇中の事故、練習中の怪我、あるいは道徳的問題(特にセクハラなど)が発生したことはないか?(あれば具体的に)

もし発生していたとすれば、その後、適切な処置がとられたか?(とられていれば、具体的にその内容と効果)

現在の指導者の責任体制、資格、水準、経歴などは十分な信頼に足るものか?(特に、外部指導者の関係の確認、公認指導者資格、指導実績など。犯歴(特に児童虐待)のないことの確認。)

口頭・文書に関わらず有効ですが、口頭・電話での質問・回答は、記録をとることをお勧めします。仮に、過去に事故があっても、その教訓を真摯に受け止め、適切な安全配慮・体制をとっていれば「むしろ信頼に足る」と評価できます。しかし事件・事故の頻発、隠蔽体質、指導者に不安が感じられる場合は危険です。その学校の他のクラブや活動での悪い噂がないかなども要注意です。学校の体質が影響するケースもあります。

2 選手の意思・自立の尊重 Self-support by Children themselves

子供の自主性やクラブの指導体制を最大限尊重しましょう。

「親の夢ではなく、子ども自身の夢」、「親がやらせる、仕向けるスポーツ活動ではない」、「自分が果たせなかった夢を子供に託し、過度の期待をかけるのは間違い」といったことです。時として「親の関心を引く、期待に応えるために」とロウイングをがんばる子供がいます。自然にそうなることは悪くないけれど、「親のためでなく、自分のためのスポーツ」になるように軌道修正が必要でしょう。「利用」すべきではありません。

過度の支援や口出し(過保護、過干渉)に注意しましょう。困っていても安易に助けるべきではありません。常に関心を維持し、時には助け・守るべきですが、同時に自立を促しましょう。

3 ゆっくり見守る Keep watch for the Growth at Long Term

子供は、クラブを通して、試行錯誤、失敗しながら成長していきます。数週間や1,2年で「成果」を求めるべきではありません。失敗を恐れず、また、その学校での2~3年の内での成果を期待するのではなく、ゆっくりといても着実な、精神的・身体的な成長を見守りましょう。

性急な成果を求めることは、体を壊す以上に「心」を壊すリスクがあります。仮に高校で世界レベルまで成長したとしても、それで、「ボートはもうたくさん!」ではどこか間違っています。高校指導者は、3年の中で「出来る内に全てを燃やせ」とか、「太く短く」と、燃焼し果てさせるべきではありません。それは「より大きな開花を殺ぎ、小さな花を開かせ枯らしているだけ、かもしれないのです。高校の指導者は大変ですが、単純な戦績が指導者の評価にはなりません。

また、一部のエリートのために他者が犠牲になるような体制、強い者が生き残り、弱者が壊れ使い捨てにされる体制も間違いです。ジュニア・スポーツはプロ・スポーツではありません。

4 常に社会常識とフェアプレイを基盤に Fair play

常にフェアプレイを基盤とすべきです。「勝つために」という論理で、もし社会常識やフェアプレイの観点から見て不自然な行為を指導されたり、子供がとるようであれば、「おかしい」と声を上げるべきです。また、学業や家庭生活とのバランスも考えるべきです。ボートに没頭し、他のこと(勉強や学友・家族との付き合いなど)を排除するのは不適切で問題です。確信がなければ、思いや不安について、適切な外部機関、ボート協会、信頼のおける経験者などに相談することも良い方法です。

5 保護者が経験者の場合の注意 IN case of Expert Parents

保護者自身が経験者や優れた漕艇選手だった場合、クラブの指導者の指導方針や技術が不適切とか間違っていると感じることもあるでしょう。この場合、よく言われるのは、過干渉を慎もう、です。それも大切ですが、私はむしろ、「要求」ではなく、「感想・コメント」として、建設的に積極的に情報提供し、指導者のレベルアップを促すことはあげるとは、良いと思います。ただし、自分の時代の理論・経験だけに根拠を置かず、新しい先進の理論を学ぶことも前提条件になりますが。